



過激な手法で賛否両論の「気候テロリスト」



ドイツでは、自分の手をボンドで道路に貼り付けて交通を妨げる、芸術作品に食べ物を投げつける、文化財をペンキで汚すなどの行為で世間の注目を引き、政府に気候保護対策の実施を要求する気候保護団体「最後の世代」の過激な手法に世論が分かれています。このような過激な方法を取る活動家を「気候テロリスト」と呼ぶ風潮もあり、2022年の不快語として選ばれるなど社会現象となっています。

真冬のスキー場に雨が降る、都市で連日30度を記録、大雨で家が流される...などこれまでにない異常気象にドイツの人たちは気候変動を実感しています。もともと地震や台風がないドイツは、自然災害に慣れておらず、気候変動への危機感が日本よりずっと強くあります。

それなのに、政府は実効力のある対策を取らない。そんな状況にしびれを切らして過激な手法に訴えているのが「最後の世代」の若者たちです。名称には、地球に未来がなく最後の世代になるだろうという意味が込められています。

ハノーファーでも連日のように道路をふさぐ座り込みがあり、さらに駅前の騎馬像の尻尾がオレンジのペンキで汚されたという事件がありました。警察が来て接着剤はがし液を使ってデモ活動家たちを排除するのに15分程度かかるので、怒り出すドライバーもいます。

芸術作品を汚すのは、世界が滅亡するかもしれないという時に、芸術と命とどちらが大事なのかという訴えですが、地元紙の

読者欄には「過激なやり方ではかえって反感を買う」「ただの犯罪者だ、自己満足に過ぎない」という否定的な意見がある一方、「政府は気候保護対策をとるべき。若者たちはそこまで追い詰められている」「車道を占拠するのは、車に乗っている人たちに一考してもらうため」という声もありました。俳優や作家など芸術家2000人が「最後の世代」の活動に連帯すると発表をしたり、反対に政治家が批判するなど世論を二分しています。

そんな中2月後半、ハノーファーのオナイ市長（緑の党）は「最後の世代」のメンバーを市庁舎に呼んで話をし、過激なデモをしない代わりに気候保護関連の要求について連邦政府に手紙を書く約束しました。「最後の世代」と対話をした市長は初めてで、これまた賛否両論が巻き起こり、国営放送ZDFで討論会が組まれたほどでした。

ドイツではデモをする権利は認められていますが、文化財を汚すのはもちろん犯罪であり、許されることではありません。そのためオナイ市長は「暴力的な活動家たちの恐喝に屈した」「犯罪者との交渉には応じるべきではない」と非難を受けました。反面、「気候保護を求める活動家の声にやっと耳を傾けた」と称賛の声も上がっています。

メンバーと対話をした市長は初めてで、しかも形だけでなく政府に手紙を書きました。こんなことができたのは、気候保護の重要性を理解しているのはもちろん、前例にとられない市長だからでしょう。オナイ市長はトルコ移民の息子であり、2019年に38歳

という若さで市長に。国内16ある州の州都という大都市で、出稼ぎ労働者の息子が市長になったのはドイツ初です。

地元紙の読者欄に「こんな素晴らしい市長がいて幸せだ」という声や「活動家というのは社会の良心である」という意見がありました。筋の通らない要求なら、市長は相手にしなかったでしょう。2月に行われたアンケートでは、市長の行動を評価するのは33%、批判は48%、わからないのは19%でした。

その後、チューリンゲン市とマクテブルク市も「最後の世代」との話し合いに応じ「2030年までに気候中立を実行するという約束を必ず守ってください」という手紙を連邦政府に書くことで、デモ活動を休止させています。

このようなことを「新しい風が吹く」というのではないかと思いました。新しい風はいっぱい吹いた方がいい。新しい風は混乱を呼ぶかもしれないけれど、止めてはいけない。

気候保護活動「未来のための金曜日」も当初は「学校をさぼり、交通を妨げるものだ」と批判されていましたが、今では社会運動の一環となっています。気候保護の重要性は周知の事実。このまま見て見ぬ振りするのか、それとも画期的な変革を実行するのか。「最後の世代」は最後の通告を突きつけているように見えます。

ごみかんドイツ特派員 田口 理穂

AKIRA の 成長記録

5年生から10年生（高1）の生徒を対象に、州主催の数学や物理、化学のコンテストがあります。明は毎年化学に応募しており、今年の課題は牛乳の密度を比較する実験でした。牛乳に色素を加えたり、豆乳やアーモンド乳と比較するなどさまざまな実験をします。実験だけでなく、写真付きで20ページほどの報告書をまとめるのはなかなか大仕事です。学校によってはクラスやサークルで参加しているところもあり

ますが、明の学校はしていないので友達と3人でグループをつくり個人参加しています。

明は毎年上位50に入り、表彰状と記念スプーン、化学関連の本をもらっていました。コロナ前はブレーメンの科学館に招待されたこともあります。上位2名は大学で2週間の研修を受けられ、交通費も宿泊費も無料です。明は10年生なので今回が6回目、最後の参加になります。「するのは大変だしストレスだけど、友達と一緒にやるのは楽しい」といい、今週は報告書まとめて追われています。